

巻頭言

創刊に寄せて

的場 信樹（くらしと協同の研究所理事長 佛教大学教授）

今回創刊することになった『くらしと協同』の前身である『協う』は、A4判の無綴じという装丁だけでなく、『協う』をKANAUと読ませる表題自体がかなり独特であり、その登場は当時強烈な印象を与えたはずである。今『協う』の古い号を手にとってみても、19年前の研究所創設に向けた熱気、今までにない新しい雑誌を世に送り出そうという意気込みの強さがあらためて感じられる。ただ当時から私たちが気を付けてきたことがある。こうしたスタンスが独り善がりにならないか、読者や会員のニーズを見失うことにならないかということである。研究者や編集者の意気込みと読者や会員のニーズとのバランスに私たちとしては気を配ってきたつもりである。それが成功したかどうかは、それこそ読者の判断に俟たなければならないが、ただ次のことだけは言えると思う。

『協う』の発行を担ってきた編集長をはじめとする編集委員が節目で新しい担い手に引き継がれてきたこと、その結果執筆者にも絶えず新しい書き手が登場してきたこと、そしてこのことが研究所の生命力の源となってきたことは間違いない。今回の『くらしと協同』の創刊にも同じことが言えると思う。変化することに怠りなく、しかもその中でたえず研究所の原点を模索するという基本的な姿勢である。研究者や編集者として伝えたいことと読者や会員のニーズとのバランスのとり方を模索してきた結果が今回の『くらしと協同』の創刊だと思う。

現在世界的な規模で大転換期にある。転

換期における協同組合の役割を考えることも研究所の原点のひとつである。エネルギー・環境の危機や市場経済の失敗を否定することはできない。これらの根底に資本主義と工業化の危機があることを否定することも次第にできなくなってきている。これまで私たちが目標とも理想ともしてきた近代社会が行き詰まり、転換が始まっていることは間違いない。だが、世界が今どのような社会システムを目指して変化しようとしているのかははっきりしない。正確に言えば今起きている変化をどのように呼ぶのか、その言葉を私たちはもっていないのである。このような時代において協同組合がどのような役割を果たすことができるのか、このことが注目もされ期待もされている。

歴史を振り返ってみると、協同組合は新しい時代の先駆けであり、未来への希望としての役割を果たしてきた。今日の協同組合運動の中に新しい世界のどのような要素が含まれているのだろうか。それを探し出し、それに名前を付けることが研究所の役割だと思う。これからは、その役割を『くらしと協同』が分担することになる。しかし、そのためには読者や会員の協力が不可欠である。研究所がその役割を果たしていくためには『くらしと協同』が読者や会員との間で円滑なコミュニケーションを実現することができるかどうかにかかっている。研究所にはこれまで以上の努力が求められるが、同時に読者や会員の方々にもこれまで以上のご支持と叱咤激励を心からお願いしたい。